

2023年
11月13日 No.1724



週刊 教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryo.co.jp>



潮流

学びの自己調整のツールに

株式会社コードタクト 教育総研 江添光城[Ⓔ]

資料

第21回「21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児)」調査結果のポイント

—文部科学省

CONTENTS

▶ 2 潮流

学びの自己調整のツールに

江添光城(株式会社コードタクト 教育総研)[Ⓔ]

▶ 5 解説・ニュースの焦点

○全国学力調査の理科にCBT導入へ

○無戸籍の学齢児童生徒36人の就学状況を調査

編集部

▶ 8 特別企画

教師集団の多様性をどう確保するか?

編集部

▶ 10 特別資料

「令和7年度以降の全国学力・学習状況調査(悉皆調査)のCBTでの実施について(素案)」から

編集部

▶ 12 生涯発達時代のよくわかる! 発達障がい入門

心理検査・発達検査の基礎理解^①

—知能検査—

水内豊和(島根県立大学人間文化学部准教授)

▶ 14 校長講話

あらゆる「強さ」から、教育方針を伝える

関根郁夫(公立学校共済組合監事、埼玉県立浦和高等学校元校長)

▶ 16 実践! 校長塾

しなやかに考え挑戦する生徒の育成を^②

種吉信二(長崎市立長崎中学校校長)

▶ 19 資料

第21回「21世紀出生児縦断調査

(平成13年出生児)」調査結果のポイント

文部科学省

▶ 35 教育問題法律相談

弁護士による、子ども支援と「子どもの手続代理人」

澤田 稔(弁護士)

▶ 36 学校事務新時代

費用面における就学支援チームの構造と協働を考える

—「生徒指導体制の構造」を下地にして

柳澤靖明(埼玉県・川口市立青木中学校事務主査)

▶ 38 学級・授業づくり 虎の巻

AかBか迷ったときは……

俵原正仁(兵庫県・芦屋市立浜風小学校校長)

▶ 40 管理職養成 教頭実務ガイダンス

業務適正化の推進

井部良一(全国公立学校教頭会事務局長)

▶ 42 高校現場最前線

地域のリーディングスクールとして

渡辺和恵(広島県立広島島国泰寺高等学校教頭)[Ⓔ]

▶ 44 現場の課題に答える教育機関

学校ボランティアの派遣・

教員向けウェブサイトの運営

伊藤 駿(NPO法人日本教育再興連盟(ROJE)理事)^①

▶ 46 データで見る教育

通信制課程の履修者割合(公私別推移)ほか

▶ 47 BOOK

『SCHOOL SHIFT あなたが未来の「教育」を体現する』

『子ども教師も日々の成長を実感できる

「学ぶ力」の鍛え方』

▶ 48 自著を語る

『シニア右翼 日本の中高年はなぜ右傾化するのか』

古谷経衡(作家、一般社団法人令和政治社会問題研究所所長)

▶ 51 品川裕香の共感教室

不登校のリアル(前編)

品川裕香(教育ジャーナリスト)

▶ 52 マイオピニオン

それでも教職を目指す

天笠 茂(千葉大学名誉教授)

潮流

株式会社コードタクト 教育総研

えぞえみつしろ
江添光城さんに聞く①



撮影：浅葉美穂

公・私立の小学校教員を経て、2021年にコードタクト入社。教育工学や教育心理学の研究をする社内メンバーからなる教育総研に所属し、サービス開発につながる理論的研究や、実証校と連携した実践的研究などを行う。また、現在は業務と並行し、大学院で教育AI研究プログラムも学んでいる。

学びの自己調整の ツールに

主体的・対話的で深い学びの実現と
学校の働き方改革にも貢献できるほか
学びの自己調整を支援するツールとしての
活用が期待される。

A-1の評価と約8割一致

— 振り返りの分析にA-1を活用している
ということですが、国語などの教科ではどの
ような内容でしょうか。

江添 例えば、「ごんぎつね」の授業ですと、「兵十とごんの関係について学ぶことができ
ました」「なぜ、ごんを撃ってしまったのか、
兵十の気持ちについて、もつと考えてみたい
と思います」と振り返りを記述した場合、前
者は、五つの観点のうちの「事実」について、
後者は、「考察／要因」「結論」について記述
されていると判断されます。

先生は、一人一人の子どもの振り返りだけ
でなく、クラス全体の分析結果を数値化して
リーダーチャートにボタン一つで瞬時に表示
できるため、例えば「もし、○○だったら」
などと「考察／仮説」に分類される記述が多
いのであれば、「今日の授業では、子どもた
ちはこんな点に着眼していたのか。だったら
次回はこんな学習課題を設定して、子どもた
ちと一緒に考えていこう」などと、授業設計
に生かされます。また、「結論」に関わる記述
をした子どもには、「さらに本人の学びが進
むように手助けしていこう」とか、個別に支
援する内容や授業のコーディネートの方針の

確認につなげることができません。

—— AI 自体も発展途上にありますが、実際に実証した結果は、どの程度の精度だったのでしょうか。

江添 実証では、AI が分類した観点と、先生方が判断した観点が、どの程度一致しているかをヒヤリングしました。実証に協力していただいた11人の先生に確認したところ、振り返りの記述について、全体の約8割がAI の分類と先生方の判断が一致しており、先生方の普段の感覚に近い精度になっていると考えています。

残りの2割にズレがあったわけですが、その要因として、一つは、子ども達の振り返りの記述内容が明確でないために、先生ならば日々の子どもの達とのコミュニケーションから「この子どもはこう言いたいのかな」と判断できる内容を、AI は判断できなかったことが挙げられます。

もう一つは、教科ごとの専門性の観点から、例えば理科であれば、AI が「考察」に分類した振り返りの記述でも、先生から見ると「ここまで踏み込まないと考察とは呼べない」と判断するケースがありました。単元にもよりますが、個別の学習内容についてはプロの先生のレベルにまで、AI が追いついていない

面があります。

ただ、現場の先生からすると、AI の精度を高めるよりも、AI が理解できるように、また他の子どもにも分かりやすいように文章を工夫させるきっかけにできる、とのことでした。そのように、「AI を逆手に取る」という指導法もあるのだなと感心しました。

時間の効率化につなげる

—— 振り返りのAI分析は、授業の効率化ではどんなメリットがありますか。

江添 私も、元教員なので、授業の振り返りを書かせたノートを全員分チェックして、メモを取っていました。とても時間がかかっていました。それが「スクールタクト」では子どもが記述した振り返りのテキストを瞬時に分析して、図示までしてくれるので、そのような客観的なデータを自分が分析する際のサポート材料にすることができ。次の授業の準備などに生かれますし、時間の効率化という点で学校における働き方改革にもつながるのではと思っています。

—— 実証の結果について、校種別の違いなどはあったのでしょうか。

江添 教科担任制である中学校や高校の先生方からは、振り返りのAI分析の機能を高

く評価していただきました。例えば、国語の先生が1組で授業をした後に、2組で授業があるときなど、1組で回収した生徒のノートを持ち歩いたり、業間や放課後に読み込んだりしていたのが、「スクールタクト」を使うことでノートを持ち運ぶことがなくなります。業間に1組の分析結果が出たら、すぐに2組の授業改善に生かせるようになったとのことです。

—— 新しい学習指導要領の趣旨や働き方改革などを実現するためのツールの一つにも活用できそうですね。

江添 そうですね。今回の振り返りAI分析の機能が、新学習指導要領が掲げている主体的・対話的で深い学びの視点による授業の改善や、先生方の負担軽減など働き方改革に少しでも役立てばという思いで開発しました。例えば、前者で言いますと、子どもたち自身が自分たちで振り返りを分析したり、友達の振り返りを参考にしたりして、主体的な学びを支援することにつながるのではと思います。また、先生方にとっては、瞬時に分析された結果をもとに、次の授業の改善につなげることができると思います。

—— 「スクールタクト」ですが、子どもたち同士が意見を交換しやすくする工夫はある

のでしょうか。

江添 昨年から「匿名モード機能」を追加しました。これは、先生が「スクールタクト」上の記述を誰が書いたか分からないようにする機能です。名前付きの意見ですと、子どもが「○○さんの意見だから、読んでみよう」などと、意見の内容ではなく人物で判断してしまうことがあります。先生が匿名モード機能を解除することで、「実は、この意見は△さんが書いてくれました」などと紹介することもできます。

誰が書いたかではなくて、どういう意見かという内容に集中できるというメリットがあります。特に、人目を気にする年頃の中学生や高校生に対し、この機能を活用しているケースが多いようです。

評価の二つの材料として

—— AIによる分析で、客観的なデータが出ますが、評価や評定との関係はどうでしょうか。

江添 私たちとしては、今回の振り返りAI分析は、子どもたちの学びの深まりを評価する客観的なデータの一つとして活用はできるが、この結果をそのまま評定につなげないでいただきたいというスタンスです。先ほど

も述べましたが、AI分析の精度は現状では8割程度ですし、そもそもAI分析は先生方をサポートするツールの一つという位置付けです。とかく分析結果が数字で出ると、その結果をそのまま受け止めてしまいがちですが、あくまで、授業を改善していくためのツールとして活用していただきたいと思います。評価や評定については、先生方の専門的な知見が重要です。AI分析の結果は、そのための根拠の一つを提供するものです。

—— 社内の教育総研という組織で、さまざまな専門分野を持つ社員が、これからの教育の課題について広い視点で議論したとのことでしたが、こうした議論の成果などを公開されるお考えはありますか。

江添 弊社代表の後藤正樹も、教育総研での議論の内容は、広く、社会に伝えていくように情報発信していくべきと考えておりますので、今回の振り返りのAI分析だけでなく、その他の議論も、それが今後の教育を変える一つの「種」となって、現場の先生方やさまざまな分野の専門家の方のご協力を得て、それが「芽」となり、「花」が咲いてほしいという夢を持っています。

GIGAスクール構想の進展で、私たちの「スクールタクト」という授業支援クラウド

も、「ICTを積極的に使っていく」という現場の先生方の努力もあり、活用が広がってきました。今後は、「ネクストGIGA」への発展が展望される中で、デジタルツールについても、その役割が問われてくると思います。

「スクールタクト」だけではなくて、この場面ではこのようなソフトを使おうなどと、コンテンツを含めて、先生方、さらには子ども自身が選べるようになるのではないかと思います。その中で「スクールタクト」の強みは、協働的な学びのツールとして子どもたちにも先生方にも簡単に活用していただける点にあると思っています。

今回の振り返りAI分析は、探究的な学びが広がっている高校現場で、生徒が自らの学びを自己調整していくためのツールとしても役立ててもらえると思っています。

「スクールタクト」の専用サイトでは、さまざまな授業実践事例についても紹介していますので、参照していただければ幸いです。

スクールタクトブランドサイト || <https://schooltakt.com/>

